

THE MOON ART CONTEST VOL.14

月のアート展

会期：2019年9月14日～10月6日

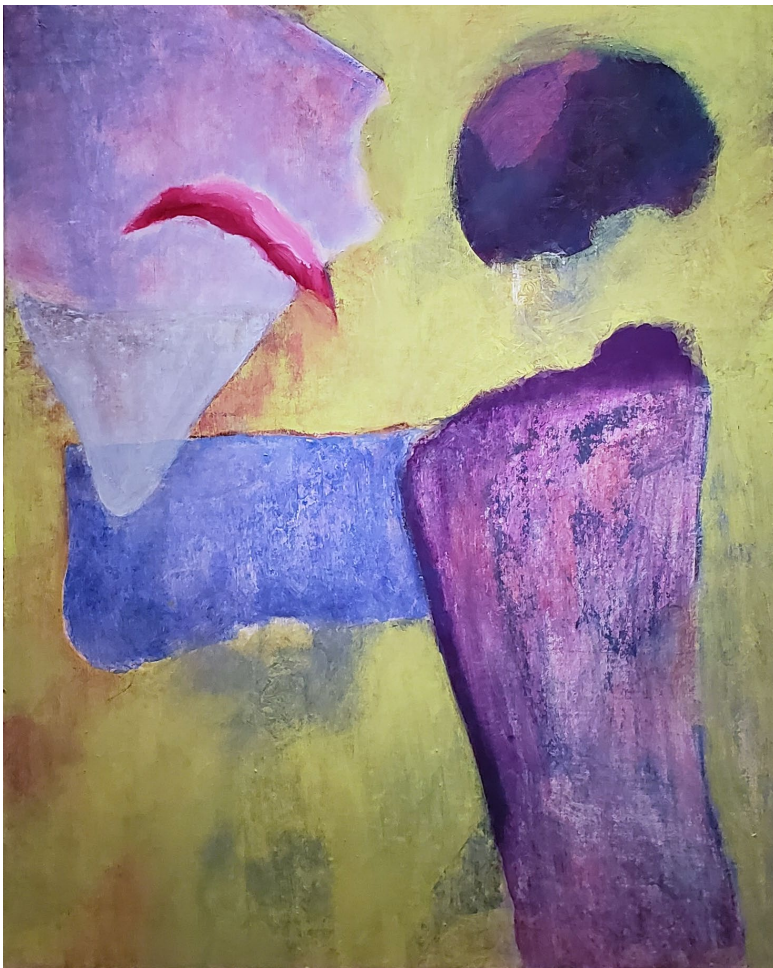
けいはんな記念公園 ギャラリー月の庭

審査員：京都造形大学 総合造形コース教授 柴田純生 先生

京都造形大学 油画コース教授 奥田輝芳 先生

【受賞作品】

審査員 最優秀賞



『奇妙な空』
林 里美

< 審査評 >

「奇妙な空」というタイトルの作品ですが、確かに奇妙です。空に形があるのかと考えるとおかしいですね。普通は、空は形のあるものではなく背景として抜けるものです。この作品には様々な色が使っていますが、空は普通青い。言葉によって与えられる概念は一般的に発信側と受信側で共通性を持たないと会話になりません。ところが絵画（造形物）は、そのタイトルから「どこが空だろう」とか「何が奇妙だろう」とか考えます。それらしき図（イメージ）や色彩がヒントとしてあると、見る人は自分の記憶と関連付け「見立て」をします。この作品は様々な解釈できる造形物であれば良いと思わせてくれます。ただ、作者自身が作品を通して、最も言いたいこと、最もやりたいことを、堂々とやる。これからもっと開き直れるかもしれませんね。

審査員：奥田



『Moon Dance』
君家 世嗣

< 審査評 >

一見するとなんでもない青と黄色の抽象画に見えます。しかしぐっと寄って覗き込むように画面の表面を見ると、とても繊細で神経の行き届いたその表情が見えてきます。絵の具を積み上げながら少しずつ画面を確かめ、作者自身が楽しむように盛り上げていった、作者の息づかいとも言える感じを読み取ることが出来るのです。月の字をバラして描いたとか、女性の顔である、というのは見る側の感想に任せれば良いことと思います。ゆったりと広がりを感じる作品ですので、これから少し大きめのキャンバスで制作をされても良いかと思います。次の作品もまた楽しみです。

審査員：奥田



『満月』
菅原 英資

< 審査評 >

CGと手書き、デジタルとアナログの対極する技法を用いた、いわゆるハイブリットの作品とでも言うべきか。現代のテクノロジーならではの作品である。月あかりを背景にした若い男女の寄り添う光景はほのぼのとした情景に終始している。描かれている人物の微妙な位置、首や手の傾きが見る者にふたりの関係、これからのこと、あるいは作者の思いや希望などとさまざまに想像させてくれる。自由に楽しめる作品である。

審査員：柴田

審査員 特別賞



< 審査評 >

3曲からなる屏風形式の作品である。その3枚おのこの表裏に意匠があり、都合6つの表情を携えている。自在に動かすことが可能であり、その都度に多彩な表情を生み出すことができる。アルミ缶でつくられた蝶、バーコードの月、発泡スチロールの山並みとそれぞれに動かすことで新たな風景に変貌する。固定したイメージでなく流動することをテーマにしたところが作品をより軽快に見せている。

審査員：柴田

『しつらい（室礼）の月』
石橋 治

【一般投票賞】

投票期間：2019年9月14日～10月6日

会期中、ご来場の皆様にご投票をいただきました結果、
上位を獲得された3作品をご紹介します。
多数のご投票、ありがとうございました。

第1位



『Fly me to the moon』
内田 勝美

第2位



『月夜の宴』
稲垣 有香

第3位



『7.6-7.7』
西平 愛